

ナトゥラリズムとシニシズムの彼方
— フォークロリズムの理解のために (4) —

Neither Naturalism nor Cynicism
— An essay on the Concept of “Folklorism” (4) —

河野 眞

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部
Faculty of International Communication, Aichi University
E-mail: smmakono@yahoo.co.jp

Abstract

The present paper following on from three previous ones dealing the concept “Folklorism” is mainly concerned with how “traditional” folk events are observed and assessed by those who coined this term in the field of academic folklore study in Germany. This retrospective is necessary, because some Japanese cultural anthropologists erroneously regard “Folklorism” as a concept describing changes taking place in folk culture in 1960s, where many social phenomena drastically shifted from the old style to the present-day. In fact, folk culture had already undergone changes since the early modern times.

After consideration above, the next topic of this paper deals with how the folk culture is related to cynicism. This is based on fact: the “cynicism” – this concept itself goes back to the ancient Greek Philosophy – appears where some folk events are not regarded as “natural” phenomena but rather as the “artificial” or the “intentionally made” Here, as an early example of this problem, we focus on an episode concerning Heinrich Heine, the German romantic poet who heard Tirolian folk songs performed by a Tirolian amateur ensemble in a London theatre in 1828/29 and was deeply disappointed, leading him to express a “cynical” comment.

14. フォークロリズムを遡る

次に、フォークロリズムの提唱者たちが、伝統文化の実際をどのような角度から見ていたかに改めて注目したい。またその上で多少のコメントを試みる。そうした検証は、この概念の理解の上で必要でもあろう。

先に、この概念に反撥する日本の識者が、フォークロリズムは1960年代辺りの時代状況に対応させて提唱されたとの誤認に走った様子に注意した¹⁾。もっとも、その見方も分らないでもない。民俗事象の改変となると現代のそれが目につき勝ちなのである。しかし、そうしたとらえ方には、大きな落とし穴がある。もし、現代の変化に焦点を当ててフォークロリズムを言うのであれば、それ以前の民俗事象は恒常性をたもっていたと理解することになる。20世紀の後半に入る頃より前には、不動かつ固定的な民俗がつづいていたと見ていることを言外に語っているわけであるが、それは正しいであろうか。フォークロリズムが適切な学術概念であるかどうかはともかく、それへの批判（と言うより誤認）に踏み出した日本の論者たちも、本稿で取り上げてきた先入観にからめとられていたことになる。民俗事象を素朴や手付かずやプリミティブなものともみならず思考の型、すなわちナトゥリズムである。しかもそれは時代思潮ですらある。ということは、研究者もまた、そこから抜け出すことが難しい。改めてドイツの民俗学の展開を見ると、ありとあらゆる試行錯誤と犠牲の末に、この一般通念でもある思考の型を突破したのは、その最大の成果の一つであった。民衆（民俗）文化は母体でも基層でもなく、行き着いた形態であるというのは、かなり早くからの論点であった²⁾。さらにフォークロリズムとの提唱者の一人でもあるヘルマン・パウジンガーは、民衆文化は〈模倣の体系〉の度合いが強いとも指摘した³⁾。この一点だけでも、ドイツ語圏の民俗学の展開には傾聴に値するものが含まれているのではあるまいか。

そこでここでの話題であるが、現代になって人手が入った民俗事象ではなく、古くから継続していると見える民俗事象がフォークロリズムの観点からはどう理解することになるのか、それをモデル・ケースにおいて見ようと思う。言い換えれば、伝統を踏襲していると見える事象との取り組みである。これにあたっては、筆者なりに工夫をこらして、二つ

1) 本稿の第一回でとりあげた伊藤幹治氏の著作『日本人の文化人類学的自画像』におけるフォークロリズムへのコメントを参照。

2) ハンス・ナウマンの〈沈み込んだ文化物象〉(versunkene Kulturgüter)のスローガンがよく知られているが、近似した観点ながら、はるかに緻密であったアードルフ・シュパーマーなどがもっと注目されてもよいであろう。この観点をめぐるドイツ民俗学学史の検討については次の拙著を参照、『ドイツ民俗学とナチズム』創土社 2005, 第1部第1章。

3) 次の拙訳を参照、ヘルマン・パウジンガー『科学技術世界のなかの民俗文化』文楫堂 2005 第4章第3章「模倣の体系としての民俗（民衆）文化」

の事例を選んでみた。第一は、フォークロリズムの提唱者たちが取り上げた材料のなかから〈野人踊り〉という行事に注目した。またその場合には、同じ対象に言及した3種類の解説を比較するという方法をとった。一つは、民俗行事に対するジャーナリズムの見方である(A)、二つ目はフォークロリズムという概念の民俗学の分野での提唱者ハンス・モーザーが同じ対象にしめした見解(B)、三つ目は同じくヘルマン・パウジンガーの考察(C)である。

もう一例は、ファスナハト(カーニヴァル)のなかの一項目を補足的にとりあげた。そのジャーナリズムの観点がいつごろ、どのようにして現れたかを、最近の年中行事研究から拾ったのである。

最初の話は、南西ドイツのスイスに接する地方、アルゴイに伝わる民俗行事である。アルプス山麓でもあるアルゴイの一角にオーベルストドルフ⁴⁾という小さな町がある。今日ではアルプスの景勝とやや寒冷であることを活かして、夏季の避暑地となっている。行政上は、バーデン＝ヴュルテムベルク州に属している。これを言うのは、その歴史が今の話題にいくらか関係するからである。

南西ドイツは中世後半以来長らく、多数の小さな領邦が入り組んでいた。そのなかの比較的大きな、いわば大名に当るのがヴュルテムベルク大公であった。19世紀はじめドイツ全土を軍事的に制圧したナポレオンは、その矮小領邦の整理をおこない、折から親ナポレオン政策をとったヴュルテムベルク大公国にその多くを編入させ、また大公国を王国に昇格させもした。アルゴイも編入された地域の一つであった。なおここで多少関係するのは、宗教上の区分である。ヴュルテムベルク大公国は宗教改革の直後からルター派プロテスタント教会で領国をまとめていた。それに対して新たに編入された地域にはカトリック教会圏も少なくなかった。もっとも時代はすでに近代にはいつていたので、宗派の区分は決定的な意味をもつわけではなく、また王国も拡大した国土を円滑に運営することに気がついた。なお言い添えると、アルゴイはカトリック教会圏というだけでなく、古くからアウクスブルク司教領国の飛び領土でもあった。

以上が歴史的な背景であるが、そのアルゴイのオーベルストドルフ町に「野人踊り」という民俗行事が伝わっている。四旬節を前にしたファスナハトの時期に、村の14人の青年たちが全身を地衣類で覆って扮装する。目と鼻と口は出しているが、頭、顔面の半分、また脚まで房毛状の苔で覆うので、一見ではゴリラの群れに見えるくらいである。頭には月桂樹の冠をつけている。この〈野人〉たちは、複雑なステップを踏む踊りを見せたり、人間ピラミッドを組んだり、さまざまなパフォーマンスを繰り広げる。なお、ファスナハト

4) オーベルストドルフ(Oberstdorf/Allgäu)の歴史と地誌の早い文献では、ヴュルテムベルク王国が実施した代官所地誌報告のそれを含む一冊がある。Oberamtsbeschreibung Allgäu.

ないしはファスナハト (Fas[t]nacht) は、地方によってはカーニヴァルとも呼ばれ、日本ではこの名称で親しまれている。リオのカーニヴァルの印象が強いが、北半球に属する西ヨーロッパでは2月にあたることが多く、真冬の行事である。

A1：オーベルストドルフの野人踊りをめぐる最近の解説

筆者の手元にある最近の民俗解説書の一冊に、この民俗行事が採られている⁵⁾。ドイツではよくクリスマスなどのプレゼントに使われる一般向きの簡便なもので、写真や図版の多い楽しい作りの本である。たいてい文化史や歴史学の出身のジャーナリストの執筆で、2004年に出版された本書もそうした一つである。問題のオーベルストドルフの野人踊りについて、そこに次のような解説がついている。

ペストが流行ったとき以来、5年毎に地元の青年たちは野人踊りを催すようになった。その扮装はケルト人に根ざし、トール神に奉仕する意味をもっていた。青年たちは苔の衣装と髭をつけ、唐檜の小枝の帯を巻き、頭には緑の月桂樹の冠をかぶる。

実際、その扮装の実際を見ると、かかる解説も無理がないとの印象も起きる。トール神は北欧神話の神で英語やドイツ語の木曜の語源となった神の名前でもある。ここではトール神であるが、広く豊穰を願う仕草といった見方をするなら、ギリシアのディオニュソス神やローマのバッカス神の信奉行事とも関係づけられても不思議ではないような外観でもある。

A2：バウジンガーが注目した 19 世紀半ばの新聞記事

この一般向きの本の解説は、筆者が偶々見つけたものだが、これと近似した理解が19世紀半ばにも行なわれていたことを、バウジンガーがその著作のなかで取り上げている。1857年に、南ドイツ最大の地方紙が、次のような解説記事を載せた、というのである⁶⁾。

5) Anke Fischer, *Feste und Bräuche in Deutschland*. Fränkisch-Grumbach EDITION XXL GmbH 2004, S. 13: "Wilde Männle Tanz" in Oberstdorf/Allgäu

6) ヘルマン・バウジンガーの前掲書から引用。参照, Hermann Bausinger, *Volkskunde. Von der Altrerumsforschung zur Kulturanalyse*. Stuttgart 1972, unveränderte Auflage: Tübingen 1981. その第3章第2節「反対世界としてのフォークロア」の最初でこの行事の検討がなされている。



この踊りは………^{アルト}旧オーベルストドルフの山の農家の若い息子たちによって、幾つもの時代を経て代々受け継がれてきた彼らの特権として上演される。それは、普通の意味での踊りではなく、ゲルマンの起源をもつバントマイム的な舞踏劇であり、おそらくゲルマン異教の神トールに捧げられた太古の合唱付きの儀式的な踊りの最後の末裔であろうと思われる。野人信奉は、かつて、ゲルマンの全体、さらにフランス、イングランド、そしてスラヴの国々の幾つかに広まっていた。彼らは、かつて、オーベルストドルフの伝承では、小さな矮人、もしくは地の精だったらしいが、しかしどちらかと言えば無邪気で、しばしばいたずら好きな性質の存在として、大きな役割を演じていた。彼らは、すばしこく動き、突然あらわれたかと思うと、再び姿を隠すのである。

これを見ると、ジャーナリストによる民俗行事の理解としては、一つの流れになっていることが分かる。またそこには、19世紀半ばにはすでに一般化していた民俗学の知識が踏まえられていることが明らかである。先に挙げた北欧神話のトール神は19世紀始め頃からの神話学の流行を背景にしており、また地や水や家の精のような俗信に関する知識が普及するのも、早くは18世紀半ばからで、19世紀にはさらに愛好されるようになっていった。

B：ハンス・モーザーによる解明

ハンス・モーザーが民俗学におけるフォークロリズム概念の提唱者であることには何度もふれた。その最初の1962年の論文「今日のフォークロリズムについて」において、ハン

ス・モーザーは、この野人踊りの行事を他ならぬフォークロリズムの例証として挙げている⁷⁾。それは極く簡単な記述であるが、事態の正確な把握という点では大きな意味をもっている。

よく言及されるものとしてオーベルストドルフの野人踊りがある。やや古いものであるが、これに関する記録自体はかなり遅れる。それによれば、1811年にトリーア選帝侯の夏離宮において侯の御前で披露され、さらに1820年頃にボーデン湖中の都市リンダウとコンスタンツ（したがってスイス）で演じられたことが判明する。

またこれに次の注記がほどこされる⁸⁾。

オーベルストドルフの地でこれが行なわれたことがはじめて記録されたのは、ようやく1892年と1897年であった。それには、休暇にこの地によく逗留したカール・ヴァインホルトが関心を寄せたことが影響したようであり、ヴァインホルトの次の報告がある。参照、ヴァインホルト「オーベルストドルフの野人踊り」（1897年）。それ以来、非常に古い時代に遡る信奉的な行事の名残であるとの理解が一般化したのが、史料に照らす限り、それには信憑性が無い。

ハンス・モーザーの記述はこれだけであるが、この行事を上古や原初期にまで遡らせていた風潮を斥けた意義は大きい。ハンス・モーザーがこれを挙げたのは、民俗行事と見えるものが、実際にはその時々のアトラクションであったことを歴史的に確認するという趣旨であった。そして13世紀や15世紀の事例と並べて、19世紀にも同じような事例があるとしてオーベルストドルフの野人踊りに言及したのである。なおここで名前が挙がるカール・ヴァインホルトは、今日のドイツ民俗学会につながる民俗学の全国組織を19世紀末に設立した人物である。グリム兄弟の晩年の弟子でもあり、それまで全国各地に個別に存在した郷土文物保存や民俗学の研究会やクラブを連合組織にしたのである。そのヴァインホルトが目にしたことが、この行事をようやく民俗学関係者に気づかせた、とも言う。

なお言い添えると、ハンス・モーザーは、フォークロリズムもさることながら、ドイツ民俗学界では歴史民俗学の定礎者として評価されている。それは、上古に淵源をもつとさ

7) Hans Moser, *Vom Folklorismus in unserer Zeit*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, 58 (1962), S.177–209. ここでは次の論文集から引用, Hans Moser, *Volksbräuche im geschichtlichen Wandel. Ergebnisse auf fünfzig Jahren volkskundlicher Quellenforschung*. München: Deutscher Kunstverlag 1985, S. 336–358, here S. 345. u. 356 (Anm. 24). Karl Weinhold, *Der Wildemännlestanz von Oberstdorf*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, 7 (1897), S. 427–437.

8) A. a. o. S. 356 (Anm. 24).

れたり、農村に由来するとみなされていた代表的な民俗行事が、宮廷や都市からはじまることを文書史料に即して解明したからである⁹⁾。

C：ヘルマン・パウジンガーによるオーベルストドルフの野人踊りの解釈

ヘルマン・パウジンガーは、その構想する民俗学の概説書『フォルクスグンデ』のなかでオーベルストドルフの野人踊りを事例としてやや詳しく取り上げた。ハンス・モーザーの刺激を活かして敷衍したのである。そこでは、この行事を歴史的に追跡した地元の研究者カール・ライザーの調査¹⁰⁾にも注目すると共に、また文化史的な脈絡のなかにも位置づけた。ハンス・モーザーがつきとめた内容と重なるが、広く読者に向けて丹念に解説されているので、事情を知るのに便利でもある。

1811年に、トリーアの選帝侯クレメンス・ヴェンツェスラウスが姉と共にオーベルストドルフを訪れるという出来事があった。侯は、1803年にバイエルンへ移るまで、アウクスブルク司教区を治めており、オーベルストドルフはアウクスブルク司教区に属していたのである。この宗教界の高位者は、住民にとっては、過去の体現者でもあった。つまり、わずかの年月のあいだに往時が栄光あるもののように回顧されるようになっていたのである。そのため歓迎が特別のものとなったことは想像に難くない。そのとき、オーベルストドルフの住民は野人に扮装して踊りながら登場し、選帝侯に「喜びの歌」を捧げたのである。それに際して、はじめに次の挨拶がうたわれた。

閣下、御前で
踊ることをお許し下され
何卒、閣下の御嘉納を
賜りたうござります

閣下がお喜びあそばされたことは明らかである。なぜなら、選帝侯は、後に踊り手たちを、近傍に構えていた自らの夏離宮に呼び寄せて、そこでもう一度踊らせたからである — おそらくそのときには、さらに多くの貴顕の前で演じられたのであろう。その後、数年間、オーベルストドルフの住民は、この出し物を携えて、リンダウやコンスタンツやスイスでの上演のための〈興行の旅〉に出たのであった。

9) ハンス・モーザーは種々の民俗行事について文献資料を丹念に追跡して、その確かな上限を明らかに下。例えば新緑樹(すなわちメイポール)を立てる習俗やファスナハトやファスナハトのなかの重要な項目などである。前掲(注7)のハンス・モーザーの論集を参照。

10) Karl Reiser, *Sagen, Gebräuche und Sprichwörter des Allgäus*. 2 Bde. Kempten 1902.

背景として、アルゴイ地方がヴェルテムベルク王国に編入されたできごとが挟まっていることは、先にふれた。王国の側も宗教政策には配慮したとは言え、南西ドイツにおけるルター派プロテスタント教会の大壇越である王国への編入は、カトリック教会を信奉する住民には居心地が悪く、近い過去をことさら懐かしがらせることになったであつたろう。そこで歓待は盛り上がった。すなわち、野人踊りのアトラクションが行なわれたのである。それは、当初は旧領主の前で、次いで旧領主が嘉されたことが弾みとなって興行化にまで進んだのである。

しかし野人踊りは、決してオーベルストドルフの住民の独創ではない。バウジンガーは、この種類の扮装が中世の宮廷でのアトラクションであつたことにも注目した。

中世半ばに製作された図柄入りタペストリーには、野人のモチーフが何度ももちいられている。のみならず、ある特殊な事件のために、少なくとも一つの中世後期の宮廷での祝いごとが記録に残された。そのとき、野人踊りが大事件を惹き起こしたのである。1392年始め、フランスの宮廷で、ある若い騎士と女官の結婚式がとり行なわれた。その折、国王シャルル6世と5人の貴族の招待客が、亜麻布の衣装に毛をはりつけた格好で〈ラ・ダンス・デ・ソバージュ〉、すなわち野人踊りを踊った。ところが、一本の松明がそのうちの一人の衣装に燃え移った。王ともう一人の踊り手だけが助かり、他の4人は、この祝いごとが後に呼ばれるようになった〈燃える舞踏会〉の犠牲になった。王は、フロワサールがその年代記に続けて記しているように、ノートル・ダムへ巡礼し、犠牲者のためにミサを捧げた。— もちろんこれは、人々のあいだに広まっていた不安を和らげるのが主な目的であつた。

この宮廷のアトラクションは、次の時代には、市民の催しものに取り入れられた。中世後期から末期にかけての都市祭礼、たとえばニュルンベルクでの仮面者跳梁などには、その一駒として野人が現れて歓迎されたのである。さらに近代に入ると、野人の扮装は、学生たちが中心になって発達した学校行事にも時々顔を見せることになった。かくして、オーベルストドルフの事例も、そうした断続的な繰り返しの一例であつた。しかし、どれほど遡っても、ゲルマン上古や、農村に連綿と生きつづける俗信とは無縁であつた。中世においても、それは宮廷的であり、都会的な性格が基本であつた。それにも拘わらず、近代に入ると、それは農村的で、久遠の彼方へ延びる故習との受けとめ方が一般化していった。その根強いことは驚くほどで、ハンス・モーザーやバウジンガーの研究の後も、そうした理解は後を絶たないのである。その様子は、19世紀の新聞記事と、21世紀に入ってからの解説において見た通りである。

以上は、ハンス・モーザーとヘルマン・バウジンガーの見解に、最近の書物を挙げた。

もつとも、以上によってももう一つ実情がわかりにくいところがあるであろう。野人踊りが、地元では19世紀はじめより前にも行なわれていたのかが気になるが、それは不明である。関係する文書資料が見あたらないのは、その行事が単発的であったからではないかと思われる。ともあれ、1811年に旧領主の御前で披露され、やがて〈興業化〉し、19世紀半ばからはファスナハトの出し物となって今日にいたるという経緯である。



盾をもつ野人：マルティーン・ショーンガウアの銅版画¹¹⁾

第二の事例：女たちのファスナハトは〈古き慣はし〉？

もう一つの事例として、やはり最近刊行された年中行事の文献をもとに話題を挙げておきたい¹²⁾。西洋の年間の祭りのなかでひときわ賑やかなものにファスナハトがある。なお先のオーベルストドルフの事例も今日ではファスナハトの一こまとなっている。もつとも、この言い方よりも、カーニヴァルの方が通りがよいかも知れない。事実、ドイツ語圏でも、一般的によく使われるファスナハト (Fasnacht/Fastnacht) や、ミュンヘンなど南ドイツのファッシング (Fasching) と並んで、カーニヴァル (Karneval) の名称も行なわれている。特にそれで知られるのは、ケルンを中心としたライン河中流域である。そこからの話題とし

11) バウジンガー前掲書より転載。ショーンガウアー (Martin Schongauer ca. 1445 or 50–1491) はアルサスのコルマルに生まれ、ライン河畔ブライザッハに没したドイツ・ルネサンスを代表する油彩・銅版画家で、アルブレヒト・デューラーにも影響をあたえた。姓のもじりと傑出した画技のゆえに“Martin Schön”のニックネームでも知られる。

12) ファスナハト (カーニヴァル) をめぐる一般的な解説は別として、ライン地方の〈女のファスナハト (カーニヴァル)〉に関する具体的な説明は次の文献によった。参照, Alois Döring, *Rheinische Bräuche durch das Jahr*. 2. Aufl.: Köln 2007, S. 103–105, „Weiberfastnacht“.

て、一風変わった催しに〈女たちのファスナハト〉(Weiberfastnacht)がある。これは女性がカーニヴァルの催しもの中心になるという趣旨で、会場でも行進のさいにも路上においても、女性が男性より優位に立つことを示すために、男の帽子をはぎとったり、ネクタイを切ったりする。また女性だけで宴をもよおしたりもする。ケルンでは、大勢の女性たちが市庁舎へ押しかけて市の鍵を引き渡させるパフォーマンスも有名で、毎年決まってテレビで報道される光景でもある。灰の水曜の前週の木曜、すなわちカーニヴァルの実質的な初日のこのアトラクションは、近年人気が高く、その伝統をもたない地方への伝播も起きている。

冬の最後の時期、食料のたくわえも底をつく四旬節の耐乏生活の直前に、一度だけ思い切り騒いで飲食を堪能する節目でもあるファスナハト(カーニヴァル)はかなり古い歴史をもっている。初例の一つとしてドイツ中世を代表する叙事詩「パルツィファール」に〈vasnet〉の語があらわれる。祭りの重要な要素として価値転倒が躍動することも知られている。阿呆(Narr, -en)という珍妙な仮装の役柄が主人役となったり、また裁判を開く〈阿呆の法廷〉(Narrengericht)という出し物もある。

そうした一こまに男女の地位の転倒が入ってくる。研究者によっては、男女の服装の交換が、ファスナハトの仮装の原点ではなかったか、と推測する人もいる¹³⁾。史料の読み方によっては、男女の別を区分の尺度とすると見えなくもない行事項目も見出される。14世紀初以降には、たとえば灰の水曜の前週の木曜に、女性たちだけが町の運営者に招待され歓待を受けたという記録が散見される。と言うより、今日の日取りはその古記録に着目した企画に他ならない。さらに、やや時代が下ると女性だけで行列を組み、その際に食品や小銭を物あつめして、それを元手にして宴会を開くといったこともあったようである。

以上は背景であるが、ケルンを中心としたライン地方の〈女たちのファスナハト〉が、中世から連綿と歴史をつくってきたわけではない。ケルンのベネディクト会の尼僧院ザンクト・マウリティウスの一修道女が1729年に書き残した次の記録などがその最も早いものとされる。

ファスナハトはまことに面白うございました。神父の方々もそれぞれ変装なさいまして、一日中、踊ったり跳ねたりなさいました。夜、尼僧院長様がお休みになりますと、私どもは、お茶、コーヒー、ココアなど飲みながらカルタやチェスに興じたものでございます。

1785年には、あるジャーナリストがやはり尼僧院の光景を伝えている。

尼僧ら、カーニヴァル催せしが、そは〈帽子の剥ぎ取り〉と呼ばれる也。

13) Herbert & Elke Schwedt, *Schwäbische Bräuche*. 1983, S.63.

これらは、一般社会の賑わいとも無縁ではなかったであろう。1810年頃にケルンの年代記を著した人物は、次のように描いている。

ファスナハトの日曜に先立ちたる木曜の朝、街路に埒もなき事ども出来す。〈被りもの取らうぞ〉と呼ばはりて、帽子、頭巾など互に取りあふ。別けても喧騒なるは旧マーケットにて、野菜扱へる女、物売り女ら、百姓らと共に、まこと乱痴気騒ぎにて踊り乱れぬ。…

これを見ると、たしかに脈絡はあったわけである。そうした背景をもつてはいるものの、1856年アイフェルの神父で J. H. シュミッツという人物が著した本には、女の木曜のいわばなおらい直会について次のような記述がなされることになる。

この日、女人ら、いと古きならはしに従ひてふるまひす。そは、入会地の森に赴き、別して美々しき一樹切り出し、それを売りたる代金にて宴もよおす運びにて、これにあたりては我意と権利にいかな掣肘も受くることなかりき。近頃、森林官庁これを禁じたるが、近き頃までいづこにても女人らその権利もちみたり。

このように宴の習俗や、そこに森から樹を切り出すといった脈絡が加わると、〈いと古きならはしに従ひ〉(nach uraltem Brauche) という理解がなされることになる。ある段階で経費の調達のために樹木を切り出すことが導入されたのは事実であろうが、それが非常に古いことを証明する資料は存在しないようである。しかし、関係者も観察者も、それを伝統的という脈絡で理解したとたん、すなわち民俗行事との見方をするや、故習との解釈に走ってゆく。先に見た野人踊りが、文化史的に追えば断片的にその要素を跡づけることができるものの、その土地に連綿と生きつづけてきたとは言えないのと同じである。そうした行事は、ある時点での着想によるアトラクションのことも少なくない。祭りを構成する要素、すなわち賑わいの催しを作り上げる手段は限られているので、外見は同じような様相を呈することになる。

因みに、祭り習俗に関するリヒャルト・ヴァイスや¹⁴⁾フリードリヒ・ジーバー¹⁵⁾の原理

14) Richard Weiß (1907–62), *Volkskunde der Schweiz*. Erlenbach-Zürich 1946, S.160. 主著のこの箇所ではヴァイスは、祭り行事を中心にして伝統的な習俗を単語とアルファベットに喩えて説明した。

15) 祭り習俗を構成する要素の考え方を述べたものとして、東ドイツ時代の民俗学研究所(ドレスデン)を主宰したフリードリヒ・ジーバーの次の論考は研究誌上に掲載された小論ながら注目されてきた。Friedrich Sieber (1893–1973), *Aspekte der Brauchforschung*. In: *Wissenschaftliche Annalen* 5 (1956), S.497–503. なおジーバーがその観点から考察したドイツ人と西スラヴ人の春祭りならびにそこでの〈死の追いたて〉行事に関する総合的な研究が知られている。参照, Ders., *Deutsch-westslawische Beziehungen in Frühlingsbräuchen. Totaustragen und Umgang mit dem „Sommer“*. Berlin 1968 (Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin: Veröffentlichungen des Instituts für Deutsche Volkskunde, Bd.45)

的な考察がよく知られているが、それによると個々の祭りの実際が単語であるなら、それを成り立たせている要素はアルファベットであって数も種類に限られているため、結果として同じ様相がさまざまな機縁に繰り返し出現すると言う。別の面から言えば、類似の外観を呈するからとて、それが一連のものであるかどうかは速断できない。しかしまたそうした仕組みに支えられて、祭りを中心に多くの習俗が〈いと古きならはし〉と見られ、それが一般的にもある種の説得性をもつようになるのが近代の一側面であった。その際、アルファベットに喩えられる構成素の多くは元素的でもある。火祭り、水漬け、緑の枝葉、あるいは共におこなう飲食、器物を打つての騒音、行列、物ねだり、道ゆく人への叩きの仕草、といったものである。これらはいずれも漠然と原初的であり、ナチュラルなのである。

15. フォークロリズムとシニシズム

民俗事象がナトゥラリズムの観念とむすびついて感得されることは、これまでの検討から明らかであろう。民俗事象に付着する本質的な性状とは、原初性、元素性、プリミティヴィティといったものである。あるいは何であれ基底的な性格の場面設定である。それが時間軸に置きかえられると、幽遠な過去、上古、いにしえ、などの表現になる。その場合の時間は計測されたものではなく、沈み込みへと傾斜する心理である。その心理がもとめる先にはあるのは、人間的な事象における[・]自[・]生[・]性であり[・]手[・]付[・]か[・]ずである。

それだけに実際がそうでないと判明すると、人の心理は屢々攪乱される。実際、民俗事象は自然景観そのものではなく人為であるほかない。自然景観もまた原初や野生であり得るかどうかはともかく、人間があつまって仕上げることがらとなれば、そこには避けがたい性状があらわれる。人為のある一定の方向へのはみ出し、すなわち[・]作[・]為である。心理が乱されるのは、この[・]作[・]為を感じとることでもある。ここにおいて、民俗事象をめぐってもう一つの精神的様態が浮上する。シニシズムである。

シニシズム (Zynismus) の名称で言い表される姿勢を人間がとることはいつの時代にもあったであろうが、それが一個の思想として位置付けられたのは、周知のように古代ギリシアにおいてであった。いわゆるキュニコス派の人生観であり、その名称の由来となったシノペのディオゲネス (Diogenes von Sinope ca. B.C. 400–B.C. 325) の事蹟に仮託された数多くの逸話が知られている¹⁶⁾。ソクラテスの死の日に生れたとの伝説、あるいはアレクサンダー大王の招きを鬱陶しいとして斥け、その陽光をさえぎることに不平を言い立てたともされる。人間社会に対する犬のごとき生きざまを選んだ者の視点であり、[・]犬[・]儒の諷刺は言い得

16) Georg Luck (Hrsg.), *Dier Weisheit der Hunde: Texte der antiken Kyniker in deutscher Übersetzung mit Erläuterungen*. 1997. (Kröners Taschenausgabe ; Bd.484).

て妙である。しかしまたそれは、日向を闊歩することに疑念をいだかない姿勢の足元を時に痛烈に照らし出す。その警句は、第三者には痛快な場面となることも多い。

因みに、ラファエロの大作「アテネの殿堂」では、シノペのディオゲネスが、ひととき大きく扱われている。プラトンとアリストテレスの少し下の階段の中央で胸をだらしなくはだけてねそべっているのがそれであるが、まっとうな学究・賢者・秀才が群れつどうなかの異色の存在で、しかもラファエロの筆はこの人物を中央に配置さえしている。対比か見せしめか、それとも何か隠れたメッセージか、それはともあれ、その位置を占めるべき存在だったのであろう。

(民俗行事へのハンス・モーザーが挙げた違和感の諸例から)

人為が作為の要素を帯びる方向へ踏み出すのは、民俗事象における不可避の趨勢であるが、そこでシニシズムが頭をもたげる。民俗学の分野でのフォークロリズムの概念の提唱者であるハンス・モーザーも、当初それに悩んだ節がある。多くの雑多な変化を紹介することに、それは必然的に付随したのである。特に1964年の第二論文がそうである。ハンス・モーザーの論考については〈事例の羅列で終った〉との論評がアメリカで受けることになり、またそれを日本の識者も鵜呑みにしているが、読み手の方に準備がなかったが故のコメントでもあったろう。それともあれ、ハンス・モーザーのそうした箇所を2ページほどを小見出しをつけながら切り取ってみたい。

a. ラジオ・テレビで報道される指相撲など

今日は、多少とも珍奇な外観を呈するものなら、新聞に取り上げられるだけでなく、ラジオやテレビを通じて際限なく膨大な視聴者に知られる可能性があるため、虚栄や誤った名誉欲や好奇心への迎合は助長されるばかりである。因みに、昔ながらの民俗スポーツに、指相撲という力競べがある。これは、2人の男性がテーブルの両側にしっかり固定して向き合い、鹿の革で作った輪に双方が中指を入れて、テーブルをはさんで引っ張り合うのである*。ところが、これまた最近では、一般の見物するところとなってしまった。1959年にミュンヘンのフランツィスカーナー酒場において、バイエルンとチロールから参加した指相撲の選手56人が、数百人の見物人の前でチャンピオンを競い合った。しかもその模様を、バイエルン放送局ばかりか、ドイツ・テレビ、さらにイギリスのテレビ局までが撮影したのである。以後も毎年ほぼ同じような経緯になり、少なくとも優勝者の顔は新聞に大写真で載ったりしている。

* SZ (=南ドイツ新聞) では1955-1963年間に13回取り上げられた(その多くは写真が添えられている)。指相撲が100年ほど前に高地^{オーバー}バイエルンの飲食旅館でどのように行なわれていたかについては、カール・シュティラーがまざまざと描写している。参

照, 注 5), S.156ff.

b. 嗅ぎ煙草のコンクール

変わったコンクールを一般に見せようとする動きは、ローゼンハイム近郊アイジングにおいて、競技的な行事とは言うものの、いささか食欲を殺ぐような変種にまで進んでいった*。アイジングでは、1960年に、嗅ぎ煙草喫煙者のクラブが結成され、それ以来、毎年、歌謡プログラムと喜劇の幕間に、人々の環視のなかで嗅ぎ煙草愛好者のコンクールを行ない、その年の王様に賞品を出すことになっている。しかも、これまた一般の興味が集まるどころから、大都市の新聞が毎回写真入りで詳しく報道するのである**。

* アイジングの人々は、昔から続いてきた牡牛に乗って競走する行事を今も4年ごとにファッシングに際して行なっており、そうした本物のアトラクションにも事欠かないことを考えると、かかる着想に至ったのは、まことに注目すべきことである。参照, SZ v. 4. und 5. 4. 1960 及び 3./4. 3. 1962.

** 伝統的な射撃の王様が奇妙な競争相手をもつようになったのは、この地だけのことではなく、アルゴイ (Allgau) でも同様である。後者からは、〈髭の王様〉(Bartkönig) が出現した。種々のコンクールにおける女王の種類も著しく増えた。パート・キッセンゲン (Bad Kissingen) の〈薔薇の女王〉、^{オーバー}高地オーストリアのアウスゼー (Aussee) の〈水仙の女王〉から、ミュンヘン近郊イスマニング (Ismaning bei München) の〈キャベツの女王〉やフランケン地方の〈胡瓜の女王〉に至るまで、まことに多彩である。ミュンヘン近郊ケーファーロー (Keferloh bei München) には、15世紀に遡る馬市が伝わっており、すこぶる農村的な特色を保持しているが、数年前からはジャズ・コンクールが企画され、さらに最も見事な脚線の持ち主に賞品を出す行事も始まった。その上、最近では、五月樹の女王と2人の付き添いの宮廷婦人まで選出するようになった。

c. 民俗的なコンクールの流行

実際、どこを見渡しても、コンクールばかりである。民俗歌謡や舞踊や音楽ではずっと前から一般的になってはいたが、今日、頻繁に見られるのは、それをラジオやテレビに乗せようとして汲々とする傾向である。方言の喋り方までコンクールになっている有様だが、種々の理由から、これには根本的に怪しげな印象を抱かざるを得ない。バイエルン^{ツァルト}森のある村では、一番大きく、音色の美しい牛鈴が賞品になったりする*。

さらに、^{オーバー}高地バイエルンでは、最も大きく見事な^{かもしか}羚羊の毛の所有者が賞品を貰っている。これは、本来、羚羊を射止めた狩人にとっては、当然の誇りとして、それ自体がトロフィーの意味をもっていた。つまり、勇敢な狩人として、危険を冒さねばならなかったからである。今日では、この帽子飾りは高い値段を出して買っているのだから、最も多く金を支払うことができた者がコンクールの勝者になる。このコンクールは、

1959年に、ツーリズムの一大中心地である〈ルーホルディングの夏季の祭りのプログラムの中の特別の催し物として〉**、地元の山岳衣装クラブ「トラウシェンベルガー」によって、キーム・ウント・ルーペルティガウ、ザルツブルク州およびチロールの民俗衣装着用者を集めて、ある移牧小屋において開催された。民俗衣装の音楽隊による演奏も加わった。そして、テレビとニュース映画の技術スタッフたちが撮影の準備を整えると、主催者側の協会のメンバーたちが、地元の団体の度重なる催促の呼びかけにこたえて、かの悪評高い頬平たたきの踊りを、プログラム以外に披露した。すべての羚羊の毛は何時間もかけて顕微鏡まで使って審査されたが、最高点を獲得して上位3賞を得たのは、羚羊毛の調節師、したがってその方面の商人であり、その点では多少の不満が起きる原因になった。不満を漏らしたなかには、やはり羚羊の毛を立てた帽子を被った、ケルンから夏季休暇にやって来たひとりの婦人もまじっていた。彼女は、〈写真向けのきらびやかなモチーフのために、優勝者に羚羊の毛を刺してやった上、たっぷり半ダースほどの回数のキスをしてやらねばならなかった。〉また続いて上位3人の男と、一回づつ名誉を称えてダンスを踊ってやったのである***。こうして、祭りは、この〈ふるさとの夕べ〉で幕を閉じた。しかも、これが成功であったところから、今後も毎年開催することが決まった。

* SZ v. 13. 6. 1961.: アルゴイでは牛鈴が最も人気のある土産品になっている。それらは大量に生産され、買った人は、ゴング、食卓鈴、ドアの呼び鈴などに用いる。なおアルゴイの農民の苦情を付言すると、牧場の牛鈴が盗まれるケースが増えていると言う。

** 参照、注1): S.202ff. それによると、この村は、ヴァカンスの時期には常に2千人の滞在客を数える。

*** SZ v. 23. 6. 1959 (予告) 及び v. 1. 7. 1959: これは行事保存としては珍しい形態であるが、これについては7月1日の記事が、民俗衣装クラブの会長の挨拶を載せている。すなわち、羚羊ハンターの伝統を称揚することは、野生の羚羊が日ごとに病気に冒されている今日、一層意義があると言うのである。また「第3回バイエルン＝オーストリア羚羊毛ショー」の様相を伝えるSZ v. 6. 6. 1961は、800マルクもするこの毛飾品の手の凝った製作工程を詳しく報道した。加えて、グロテスクな出来事も起きた。羚羊毛が天候にすこぶる敏感であるところから、祭り当日は雨天だったため、持ち主はそれを帽子に差さず、油紙に包んで内ポケットに入れて持参したのである。

これらの事例を紹介するハンス・モーザーの文体に、鼻白むような口吻があるのはたしかであろう。民俗事象が報道されるだけでなく、報道向きに改変されるがゆえの違和感とも言える。その点では提唱者自身もシニシズムの危うさに接していたのである。

16. 民俗イベントへのシニカルなコメント？ — 詩人ハイネの反応

民俗事象に自生性や素朴であること、すなわちなチュラルであることを期待し、それが裏切られると、心理が乱されるのは決して稀なことではない。その早い一例を、バウジンガーが、フォークロリズムに関する論考に用いている。フォークロアがショー化・ビジネス化への道を歩みはじめた初期の事情であるが、それに対するハイネリヒ・ハイネの論評である。

詩人ハイネは、1828年から29年にかけての時期、ロンドンにおいてチロールの民謡歌手のコンサートを鑑賞した。その頃、オーストリアやスイスの谷間を後に、民謡を歌って各地を興行するグループが活動をはじめていたのである。そのよく知られているのはオーストリアのライナー兄妹であるが、やがて類似の団体が幾つも出現した。ハイネがロンドンで出遭ったのがそのいずれであるかは定かではないが、次のような感想を書き綴った。もともと、はじめはその久々に接する母国語の歌に感銘がこみあげた。

その歌は、チロール・アルプスにおいて素朴敬虔なヨーデルで歌われるもので、北ドイツの人間の心に染入るばかりであった。……

だが、やがて失望と憤慨がそれにとって変わった。

…すべてが醜く歪んでおり、私の心のなかで不快感へと高まっていった。上品な唇に浮かぶ微笑も、蛇のように私を刺すのだった。ドイツ語の純潔が目の前で陵辱されるように思われた。ドイツ人の情念生活の最も甘美な神秘が、外国の粗暴な人間たちによって俗化されるような気がした。恥ずかしそうに身を隠していたものを恥知らずたちが恥ずかしげもなく売りつけているのを前にして、一緒に拍手することなどできなかった。私と同じ思いで共にホールを後にしたあるスイス人は、的を射たコメントを口にした。(私たちスイス人は、金のために多くのものを提供します。最上のチーズ、それに気持もこめます。しかし他国でアルプホルンを吹くことはできません、ましてや金のためなどには)¹⁷⁾

バウジンガーは、この目を見張るような証拠物件の説得力にひとまず行論をゆだねて淡泊な扱いですませているが、それだけに外部の者には、周辺の事情をさぐりたいとの誘惑にかられるところがある。そこで以下、少しく補足である。

17) Hermann Bausinger, *Volkskunde. Von der Altertumskunde zur Kulturanalyse*. 1971, 2. Aufl.: Tübingen 1981, S.165f.

ハイネやその会話の相手の憤慨に接すると、今日の私たちが、どれほど遠くまで来ているかに思いを致さないわけにはゆかない。今日では、ヨーデルもアルプホルンも観光客を迎える基本的な道具立てであり、スイスの観光案内にはそれらの写真が当然のこつのように刷られている¹⁸⁾。のみならず、ヨーデルとアルプホルンというハイネが偶々挙げた組み合わせは、今日ではスイスのイメージのステレオタイプともなっている¹⁹⁾。もちろん、それと類似の事態はどこ国でも、どこの地域でも起きており、そうした現代の動向を突き合わせると、ハイネの論評の歴史的性はいよいよ際立つ。正に前々世紀の遺物である。しかし、ハイネのコメントには、それだけではすまない別の側面があったように思われる。その側面の故に、ハイネは、チロールの歌謡者たちの公演に通常の反応を超えて反撥したのではなかったか。

そこでいま一度、状況を整理しておきたい。ハイネが出会ったのはスイスの歌謡者であったのかも知れず、特定するのは難しいが、事態を理解する上で中心になるのは、やはりオーストリア・チロールのツィラー谷から出たライナー兄妹であろう²⁰⁾。同名の歌謡グループは数世代が数えられるが、“Ur-Rainer”と呼ばれる初代ライナー兄妹こそ民謡の世界公演という新しいパフォーマンスの開拓者であった。ツィラー谷の肉屋の親方で素人ながらもテノールの美声を近隣に響かせていたヨーゼフの5人の子供たち、アントーン、フランツ、ヨーゼフ、フェーリクス、それに娘のマリーアを加えた5人である。彼らが〈ふるさとの民謡〉をたずさえて生まれ育ったアルプスの谷間を後にしたのは1824年と推測されている。そして1825年にはウィーンで歌った。評判がよかったので、1826年11月にはベルリンのオペラ座の舞台にも立った。さらに1827年5月にはロンドンに到着した。イギリスでは、ウィンザー宮殿において国王ジョージ4世と後に女王となる公女時代のヴィクトリアの前で歌った。これで人気に拍車がかかり、さらに何ヵ所かで公演をおこなった。1828年中にはいったん故郷へ帰り、しばらく活動はあきらかではなくなる。そして10年後の1839年にはヴィクトリア女王の戴冠の祝賀に合わせて再びイギリスで公演をおこなった

18) 種々のパンフレットには、ヨーデルを体験できるアトラクションへの案内も写真を添付して紹介されている。；またスイス政府観光局 Web site. (2004) には例えば次の案内を見ることができる：「エール機上の演奏会」 ジャック・ルヴェルダン駐日スイス大使 (談) 〈山々や溪谷にこだまするアルプホルンの音色は、人々の感動を呼び起こします。スイス人奏者もよく来日しますが、最近ではスイス航空チューリヒ〜東京間の機内で即興演奏会が開かれました。同乗していたパーサーの話では、史上最も高所で行われた演奏会に、乗客の皆様は感銘を受けられたとのこと。〉

19) 一例として筆者の手元にあるチラシの一つに名古屋市市の宝飾店のイベント企画があり、そこにはヨーデル歌唱とアルプホルン吹奏の写真が載っている。「安藤七宝店名古屋本店〈夏の海外おみやげフェア〉：特別企画・ヨーデルとアルプホルンのミニコンサート 平成18年8月26日」、出演者は「仙台市ヨーデルチロリアン」と「長野県大桑アルプホルンクラブ」と記されている。

20) ライナー兄妹の初代と二代目の活動については次の文献を参照、Hugo Klein, *Die Zillertaler Sängerbund Rainer und die Schützenfamilie Ritzl*. Innsbruck 1928.；ツィラー谷はイン谷の大きな支谷で、インスブルックの東40km付近に南北に延び、行政上は一帯はシュヴァーツ (Schwarz) の管轄である。

が、一回目ほどの反響は得られなかった。この時期になると、同じくチロールの民謡歌手と称して何組ものグループが活動しており、競合が始まっていたからである。ライナー兄妹たちはそのライヴァルを〈偽もの〉とみなした。それでもともかくも収入を得ることになり、帰郷して農地を購入するなどして安定した生計へ進んだ。なお彼らの活動、特にロンドン公演にはパトロンがいたことも判明している。第一回目のロンドン行きを誘ったのは、オーストリア帝国の駐イギリス大使エステルハージ伯²¹⁾であった。エステルハージ家はハンガリー西部の大貴族で、古くは長期の対オスマン・トルコ戦線で武勲を重ねハンガリー副王をも出してきた屈指の名門である。またヨーゼフ・ハイドンのパトロン、あるいは伯爵家令嬢のピアノの教師を一時期フランツ・シューベルトがつとめたことでも名前が挙がる。もっとも、パウル(3世)・アントン・エステルハージについて言えば、傲岸な太守のイメージからはやや逸れて、むしろ毛並みがよくフットワークの軽い外交官であり、稀代の縦横家メッテルニッヒの忠実な幕僚であった。とまれ、兄妹がイギリス国王の御前で民謡ショーを披露する運びになったのは、この貴公子がお膳立てしたようである。のみならず、兄妹の一人は歌謡の巡業を引退した後、エステルハージ伯の計らいで地元の郵便局長にしてもらった。



初代ライナー兄妹 1827年²²⁾

21) オーストリア帝国の駐オランダと駐イギリスの大使をつとめ外交官として知られた Paul III. Anton Estehházy de Galantha (1786-1866) の領地はハンガリーとスロヴァキアにあって、特にツィラー谷とは関係はなかった。異国に歌謡を携えて活躍する民衆に支配者が好感を寄せたという脈絡であつたらう。強いていえば、ツィラー谷はその一部がザルトツブルク司教領国からオーストリア帝国に編入された経緯があり、ハプスブルク家の藩屏を自認していたエステルハージ伯が関心をもった面があつたかも知れない。エステルハージ伯の経歴については次を参照、ADB, Bd. 6, S. 388-390.

22) 出典：H. Klein 前掲書

以上はやや細かなデータであるが、これからも知られるように、民謡歌手は一般から歓迎を受けたのである。それが時代の風潮でもあった。あるいは、そうした風潮がこの頃ようやく始まったと言ってもよい。民謡の収集が推進されただけでなく、民謡をうたうことを目標に掲げた新しいグループの形成が勢いをつよめていた。より正確に言えば、体操と民謡が、そうしたグループ形成の主たる結集項目であった。体操とは、フリードリヒ・ヤーンが提唱した体操運動のことで、昂揚するナショナリズムの一翼でもあった。そこにリベラリズムがどこまで重なるかは、〈体操の父〉への評価も併せて議論が分かれる²³⁾。それはともあれ、ナショナリズムの性格を帯びていたのは歌曲クラブも同様であり、特にドイツでは統一的な国民国家になっていなかったことが、ことさら言語的な連帯が意味をもった。しかしビスマルクによる統一によってその役割が終わったわけでもなかった点では、ドイツの特殊事情を超えて近代の必然的な動向だったのでもあろう。この歌曲クラブは、ドイツにおいて〈ふるさと〉(Heimat)の観念の孵化器であり、また今日に通じる特殊な自然観念のドイツにおける培養施設でもあった。多くの人々が歌謡を紐帯として結集する動向もその現れであった。指標を挙げると、その後一般化する、町村を挙げての喉自慢大会がオランダで始まったのは、1834年であったとされる²⁴⁾。そうした一般的な風潮を背景に、ライナー兄妹や、それに倣う多くの〈ふるさと歌謡〉アンサンブルが活動をみせたのであった。それゆえ時代の趨勢であった。

それに対して、ハインリヒ・ハイネが反撥したとすれば、そこには何があったのであろうか。ハイネは時流に背を向ける拗者ではなかった。民謡が狭い土地を超えてうたわれ営利ともなる現象にはゲーテも関心を寄せた節があるが²⁵⁾、識者それぞれに個的な思いがそこに重なったのであろう。この問題はもう少し掘り下げてもよさそうである。

23) 〈体操の父〉(Turnvater)とも賞されてきたヤーン(Friedrich Ludwig Jahn 1778–1852)については日本でもスポーツ関係では近代スポーツの形成の一コマとして取り上げられる。；内外の百科辞典でも見出し語となっているが、特に“ADB”は詳細である。；また拙著でも、そのナショナリズムと、特に“Volkstum”の造語者としての側面についてとりあげた。参照、『ドイツ民俗学とナチズム』文楫堂 2005, p.203–258 「ドイツ思想史におけるフォルクストゥームの概念」；さらに最近の文献も参照, Oliver Ohmann, *Turnvater Jahn und die Deutschen Sportfeste*. Sutton/Erfurt 2008.

24) 19世紀の半ばには歌謡への国民的な関心のたかまりを背景に、その直近の歴史にも注意が向けられた。次を参照, Otto Elben (1823–99), *Die volktümliche deutsche Männergesang, seine Geschichte, seine gesellschaftliche und nationale Bedeutung*. Tübingen 1855. ここには最初の喉自慢大会はオランダ東部で1834年で開催されたと記されており(S.116), 今日も目安となっている。；また近年の次の文献を参照, Dietmar Klenke, *Der singende „deutsche Mann“*. *Gesangervereine und deutsches Nationalbewußtsein von Napoleon bis Hitler*. Münster 1998.

25) H. Kleinの前掲書によれば、エッカーマン『ゲーテとの対話』第二部1828年6月15日に記録された〈チロル人の歌謡者〉は初代ライナー兄妹であったと言う。彼らは民謡アンサンブルの元祖の性格にあったので、その可能性は高い。